

平成二十七年 度

清風南海中学校入学試験問題（A入試）

国語（六〇分）

注意

- ① 解答用紙に受験番号、名前を記入しなさい。
- ② この表紙には受験番号のみを記入しなさい。
- ③ 答えはすべて、解答用紙に記入しなさい。
- ④ 字数を数える場合、ことわりのない限り、句読点や符号ふごうなども一字として数えなさい。
- ⑤ 選択問題はすべて記号で答えなさい。
- ⑥ 解答用紙、問題用紙の両方とも提出しなさい。

受験番号

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いまの日本で茶の湯をたしなむ人々、いわゆるお茶人口は何十万とも何百万ともいわれている。いまでも増えつづけているものと
①思う。

そのほとんどは女性である。

利休の時代には、茶の湯はまず男のものであった。戦国時代、戦で命を落す、その覚悟を日常とする生活の中での茶会であ
②れば、一期一会という感覚が自然と気持の中にはあっただろう。

いま一期一会という言葉は、よく考えた上で理解はするが、その実感はない。文明のお蔭で、命を落すという日常の覚悟がない
からである。飛行機で高空を飛んでいるとき、あるいはハイウェイを高速で飛ばしているとき、わずかに命を外気にさらしてい
る。このままちよっと間違えば死ぬこともあり得ると考える。しかしまず間違いはないだろうと思い、だいたいは文明に守られて
その通りになる。そのことに象徴されるように、お茶の意味も、価値も、ずいぶん昔とは変ったものになっているのだろうと思
う。

(中 略)

お茶が女性のものとなったのは、戦国の動乱が収束して江戸時代も後期になってからのようだ。世の中が安定し、余裕が生まれ
たところで、茶の湯は女性のカルチャーセンターとなった。それはいまの時代相と同じで、いま講演会や展覧会や音楽会という文
化的催しに集まるのはほとんどが女性である。各種文学の新人賞にも、ほとんど女性が増えてきている。男性は政治経済一筋であ
り、その息抜きのゴルフやカラオケにしても、それは人脈強化の仕事の延長である。男性一般には遊興はあっても
はないのだ。だから江戸時代も、そしてこの昭和平成時代も、女性による文化の寡占化はどんどん進み、その流れの中で茶の湯は
ますます栄えている。

そんな状態にひたっているので、利休が晩年に言い残した、

「私が死ぬと茶は廃れる」

という言葉を見たときにはドキリとした。

利休はいったい何を言おうとしたのか。

文献によつては、

「今後十年もすれば茶は廃れる」

という言葉になっている。いずれにしろ私たちからすると、茶の湯が勃興した桃山時代にあつて、いよいよこれからと想像する
が、ざつぷりと冷水をかけられたみたいだ。

察するところ、すでにこの時代から茶の湯が形式としてだけ固まっていく風潮があつたようなのである。利休はそれを嘆いてい
るのだ。茶の湯を好む人がふえるにつれて、師匠も多くなつたが、規則ばかりを細かくいたてて、世俗の義理に墮落し、ちよつ
とした作法の無知をあざけるようになり果てたという。そんな利休の言葉が残されている。

なるほどと思う。それはいまの私たちにも、そのままそっくり実感できることである。茶の世界でなくても、どの世界でも、こ
の風潮を見ることができ。むしろこの風潮こそが多数かもしれない。いつの時代にも見られることなのだろう。社会一般として
は、この風潮を基本としているとさえいえるほどだ。③それを知った利休の嘆きの言葉なのだろう。

しかし先に挙げた、

「私が死ぬと……」

の言葉になると、嘆きだけではないような気がする。嘆いているというよりは、もっと攻撃的なメッセージが伝わってくる。

はじめてこれを見たときには、何と傲慢な言葉だろうと思った。茶は利休だけで持っているのかと、とくに同時代の茶人は思
うのではないか。しかし利休によつてこそ茶が究められていったことは確かなことで、それはしかも言葉では間に合わぬほどの微細
な意味をつないで究められていった。④言葉以外に受容器をもたぬ人には、当面受け取りようのないことなのである。

この利休の言葉は、そのことを言おうとしているのではないか。つまり言葉で言えぬことこそが茶の湯の大本であると、それを
言葉で言ったのだろう。それを言葉でいうと「私が死ぬと……」となってしまう。

⑤誤解されるすれすれのところを言葉が横切る。

つまり直感の世界のことだ。直感とは言葉の論理を追い抜く感覚にはかならない。言葉を追い抜くし、言葉をすり抜ける。言葉
の論理からあるかなきかの、あるといえればそれはまやかしいではないかと思えるほどの危ういものである。しかしあてずっぽうで
はなく、それはあくまで言葉の延長上にあることはあるのである。

ある基本的な感覚基盤をもった集合があって、その上でのほんのわずかな変化によってメッセージが飛び交う。それが直感の世界でのやりとりである。それを分析的に言葉に置き換えていくことは、長い時間を待てばできなくはない。しかしその言葉の分析を積み重ねた末に直感に至る、ということはないのである。つまり閃きは、言葉で追うことはできても、閃きを言葉が追い抜くことはできない。言葉にとっては、ほとんど幻想世界だ。つまり言葉の届かぬ先で意味の沸騰している世界である。微細な意味が、その沸点の上で小さなダンスをしている。それが直感的世界の断面図である。それは後からの言葉ではなく、その沸点の上に身を置いたときにだけ感応できる。

そこでやっと、先の利休の言葉が身をもってわかる。この茶の湯の沸点における意味のダンスをこそ踊るべきだと利休は言うのだろう。それが絶えれば、沸点を下がったところの言葉の論理が、あとをなぞりはじめる。人々はそれをなぞることだけに精を出しはじめる。茶の湯はそれをなぞることだけで固められて、沸点の上でのダンスは遂に消え去り、そのまま廃れる。

つまり言葉で拾ったものだけをなぞる間に、茶の湯は形式だけのものになってしまったということだろう。これは非常に危険なことで、直感と言葉の間の落とし穴みたいなのだ。本人は形式に墮するつもりはなく、とにかく見えている言葉の論理を伝って、その師とする人の位置に近づこうとするのだけど、近づけば近づくほど精気が失せていく。つまりその師とする人の感覚基盤がないところで、結局は形式の抜け殻となるのである。

(赤瀬川原平『千利休 無言の前衛』による)

問1 ~~~~~ ④「たしなむ」、⑤「二期一会」、⑥「傲慢」の本文中で使われている意味として、最も適当なものをそれぞれ次の中から選りなさい。

- | | | |
|----------|-----------------|--------------------|
| ④ 「たしなむ」 | ア 心を清めて行う | イ 必死で取り組む |
| | ウ 身を捧げて尽くす | エ 好んで親しむ |
| ⑤ 「二期一会」 | ア 一生に一度限りであること | イ 無意味な一生を終えること |
| | ウ 一つのものに心をこめること | エ 一度に多くの人と出会うこと |
| ⑥ 「傲慢」 | ア はなはだしく嘆き憤ること | イ 深い悲しみに絶望していること |
| | ウ おごり高ぶってあなどること | エ 真理を究め動じない心境であること |

問2 に入る最も適当な言葉を本文中からぬき出して答えなさい。

問3 ——— ①「そのほとんどは女性である」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選りなさい。

ア 男性は戦国時代では戦に、現代では政治に没頭しており、茶の湯のような催しはいつも女性によって担われているから。

イ 男性がしている活動は遊興も含めて仕事の延長上に位置するもので、茶の湯等の催しに男性が関わらなくなってきたから。

ウ 戦国時代の動乱が収束したことで、茶の湯の本質である命を落とす覚悟を持った男性が必要とされなくなったから。

エ 各種文学の新人賞にもどんどん女性が増えてきているように、芸術的感覚の鋭い女性が活躍できる時代になったから。

問4 ——— ②「それを知った利休の嘆きの言葉」とありますが、「それ」の指す内容を五十字以内で説明しなさい。

問5 ―― ③「言葉以外に受容器をもたぬ人には、当面受け取りようのないことなのである」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 茶の湯は言葉では説明できない曖昧な感覚で継承されるようになったので、その感覚を理解しない人は茶の湯という文化を危うくしてしまうということ。

イ 茶の湯は利休に直接教わってこそ本質を理解できるものなので、軽い気持ちで他人伝いにその言葉を聞くだけの人には究めることはできないということ。

ウ 茶の湯は言葉には言い表せない微細な意味を積み重ねて究められたものなので、何事も言葉によって理解しようとする人には本質がわからないということ。

エ 茶の湯は言葉では表現できない直感と、それを基にした言葉との集大成であるので、一つの言葉によってまとめようとする人には理解できないということ。

問6 ―― ④「誤解される」とありますが、どのような「誤解」ですか。解答欄の形式に合うように本文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。

問7 ―― ⑤「その沸点の上に身を置いたときにだけ感応できる」とありますが、その理由を説明したものととして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 茶の湯の大本である直感の世界において、その本質はニュアンスで感受されるものであり、言葉で明確にはつかみ取れるものではないから。

イ 茶の湯の世界では師匠から弟子へと人と人とが直接に出会って奥義が継承されるものであり、言葉で表された茶の形式は用をなさないから。

ウ 時代を経るに従い、茶の湯が形式として固まっていたが、本来の茶の湯はダイナミックな動きの中で感得される実用の中に成立しているから。

エ 戦国の動乱期に成立した茶の湯を理解するためには、無言でメッセージを交わしながら直感を分析して、言語化していくことが大切だから。

問8 ―― ⑥「直感と言葉の間の落とし穴」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 師弟という形式を重視するあまり師の論理を絶対化してしまい、自らの直感によって新たな茶の境地を切り開いていく可能性を失っていること。

イ 師との直接的なやり取りで言葉にならない微細な意味を体感することをせずに、師の語った論理だけを追って、その言葉の真意を見失うこと。

ウ 茶の湯は実体験を通じて直感するもので、体系的な論理を構築する必要はないのに、無駄に言葉を費やして、弟子には形式しか伝わらないこと。

エ 茶の大本は言葉で表せないため、言葉の論理だけを追って師の境地に近づこうとしても理解ができず、茶の湯が形式的なものになってしまうこと。

問9 本文の展開の説明として、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 茶の湯が女性を中心に親しまれていることを紹介し、茶の本質が理解されていないのを嘆いている。

イ 茶の湯が時代を経て変化したことを説明し、現代の茶は利休の求めたものに最も反すると批判している。

ウ 茶の湯が元々は命に関わる文化であった歴史的背景を伝え、茶の本質を究める困難さを指摘している。

エ 茶の湯が広く受け容れられた経緯にふれ、利休の言葉をもとに茶の本質についての考察を述べている。

鶴子の母は箒を持つ手をとめ、表でだれかと立ち話をしていた。相手がだれか、家のなかの鶴子にはわからない。藤色の鼻緒をすげた下駄と足の一部が暖簾の下から見えるだけだ。そうこうするうち、その足にズック靴をはいた小さな足がまつわりつきだした。甲の部分が黒っぽいのは墨で名前が記されているからだろう。その汚れた白い靴に見覚えがあった。なんだ、洗のお母さんだったのか、それにしても洗のやつはまたあんなにべたべたしている……脹脛から下しか見えなくても、いま彼がどんな姿勢をとっているか、鶴子には **A** ① に取るようにわかる。それもそのはず、彼女だって表へ飛び出していき、同様に母親の腕にぶら下ったり、豊かな腰に背中を擦りつけたりしてみたいのだ。けれどもそうしない。それをすれば洗は黙って見ではおらず母親を困らせるまで甘えるのがわかっていているからだ。

洗も鶴子も同じ小学一年生で、しかも四人きょうだいの末子だった。洗のほうは上に姉ばかりが三人で、その三番目の姉とは八歳も年齢が隔っていた。鶴子のほうは、ちょうど三歳ずつ間隔のあいた姉と二人の兄の次に生れてきていた。同じ末子といっても、その実情はいささか異なっていたのだ。

「鶴子も家でゴロゴロしてますわ。洗ちゃん、あがって遊んでおいで」
母親のそう言う声に、**②** 鶴子はいそいで座り直し、読みさしのまま放ってあった絵本を行儀よく膝のうえに拡げた。そして外の話し声に耳を澄した。

「けったいな子ですやる。せつかくあ言うてももうてるのに」

③ 洗の母が済まなそうに言う。
「やっぱり、と鶴子は思う。洗は、よその家へ行くのは嫌なのだ。自分の家へ友だちを呼んで遊ぶのでなければ安心できないのだ。」

そんな洗が、地藏盆のときという弾みか、鶴子に誘われるまま午後ひとときを子供会に参加したことがあった。折り紙をしたり、小さな提灯に名前を書いたり、お菓子を食べたりして帰ってきたとき、彼の家の玄関の戸には鍵がかかっていた。庭にまわり、ガラス戸の奥をすかして見てもやはり誰もいなかった。洗はすぐにべそをかきはじめたが、鶴子に宥められ、しぶしぶ彼女の家へやって来た。茶の間へあがればと勧めてもきかず、玄関の上り框に腰をおろした。彼女が話しかけても、心はどこかほかにあるらしく、ろくすっぽ返事もなかった。横からワツと大声で脅してやれば、間違いない飛びあがって驚いただろう。いや卒倒した。

てしまったかもしれない。そんなぼんやりした横顔を見ていると、彼女は自分がだんだん意地の悪い気持になっていくのがわかった。

どうしても閉めるのは嫌だと言いはる洗のために三分の一ほど開けてあったガラス戸の隙間からなにを見つけたのか、彼は框をすべり降り外へ駆けだした。いまのいままでのろろと踏ん切りの悪い言動をしていたのが嘘のように、 **B** 動きだっ

あとを追った鶴子が舗道に一步踏み出したまま身動きできなくなったのは、洗と母親が縫あうさまを目の辺りにしたからだ。彼は小さな拳で力いっぱい母親を打っていた。アホ、お母ちゃんのアホ、と罵る声が鳴咽にまじり、拳が肉を打つ音が重たく響いてくる。打たれながら母親は息子に話しかけ、声を彼の耳に届かせるため中腰になった。その唇が興奮のため真っ赤になった耳朶に近づいたとき、彼の右の拳が彼女の眼鏡を弾き飛ばしたのだ。細い銀縁の眼鏡は、色の白い、唇のくっきりと形よい彼女の顔によく似合っていたものだ。それが舗道に落ち、運悪く片方のレンズが割れたようだった。

④ はっとしたのだろう。洗は急におとなしくなった。割れた眼鏡を拾いあげようとする母親の首筋に両腕をまわし、その胸に顔を押しつけた。彼女は怒るにちがいない、と成り行きを注目していた鶴子は思った。鶴子の母ならここで子供の臀をひとつかふたつ打つはずだ。ところが洗の母は、息子の背をゆっくり撫でるほかなにもしない。

傍に寄った鶴子が散っていたレンズのかけらを拾い集めた。

「おおきに、鶴ちゃん」

眼鏡のない洗の母の顔はよそのおばさんのようだったが、黒目がちの二重瞼の目がそれまでに見たこともないくらい優しいものだった。

こんなふうだったから、誘われても洗はほとんど外へ遊びに出なかった。自分の家なら大丈夫というのは、母親がいてくれたからだ。

「なんせ、もう赤ちゃんは出来んもんと諦めてたとこへ授かったのが男の子やったから、珠江さんも旦那さんもえらい喜ばはってな、それが洗ちゃんや。大事に育ててはったけど弱い子で、お医者に通わん日のほうが少いくらいやった」

珠江というのは、洗の母の名前だった。

「それでおばちゃんは洗ちゃんのこと、怒らへんの？」

鶴子は母親にたずねた。

「そやなア……」

母親は言葉を濁し、ミシンをかけるため裁縫台の前から立ちあがった。

⑤「洗ちゃんは、押入れに入れられるような悪いことせえへんのと違うやるか」

うまい具合に話題をすり替えようとした。あとについてミシンの傍にしゃがんだ鶴子は、ところどころ摩り切れている別珍の足袋をはいた母親の両足が、踵を軸に踏台のうえで上下に動くさまを見つめた。カタンカタンとミシンの音は長く続いた。

鶴子は、自分ほどよく叱られる子供はない、とつねづね思っていた。すぐに拗ねてふてくされるので押入れへ入れられる。押入れには鍵がないからいつだって逃げ出そうと思えばそうできるのに、彼女は、出してエ、と言って泣く。さすがにこのごろはそんなお仕置はないが、代りに自分から進んで入る。蒲団にもたれ、あるいはその上へ横になり、淡い紫の闇を音もたてずに齧っている。そして甘たるい孤独に腹がふくれば眠るのだ。人の肌と夜の匂いが沁みた蒲団に沈みこみながら。

ミシンの音が止んだ。細かい振動にふるえていた廊下の板も、鶴子の臀の下でやっと静まりかえった。木目の浮いた冷たい板に膝を抱いた姿勢のまま横に転がりながら、彼女は、怒らない母親、柔らかな母親として、珠江の顔を思い浮べていた。

小学校へは、鶴子のすぐ上の兄に連れられて行く。四年生の次郎は、鶴子と洗と、少し先にある牛乳屋の守一と、一年生ばかり三人に付き合わねばならない。来年の三月までという約束を次郎は母親とのあいだに交している。守一は活発な子で、次郎と並んで歩きたがる。そのあとを洗と鶴子がついていく。

幼稚園のとき、見送りに出た母親の手を握りしめどうしても離すことができなかった洗は、迎えにやって来た保母に体を触らせるのさえ嫌がった。友だちや絵本や遊具には少しも気を惹かれようとはせず、したがって幼稚園へはほとんど行かずに過ぎた。

「鶴ちゃん、洗に聞かせてやって。な、幼稚園でどんな面白いことするのやろう」

珠江に頼まれ、話をするのもたびたびであったが、洗はなんの興味も示さなかった。どないしよかしら、来年は小学校やいうのに、と気を

C

母親にはおかまいなしに、彼は自分の家のなかでは機嫌よく遊ぶのだった。

ところが意外にも、洗は、小学校へはあまり嫌がらずに通いだしたのだ。どんなに珠江が安堵し喜んだかしのれない。

「洗ちゃん。なんで幼稚園へは行かなんだのに、学校へは行くの？」

と鶴子がたずねたとき、彼はすらすらと答えた。

「しゃあないもん。お母ちゃんが泣くよって。もうこれ以上泣いたら目が潰れる、てお医者さん言わはったさかい」

目が潰れる……鶴子は、その言葉にどきっとさせられた。

⑦「ふーん、洗ちゃん、偉いね」

彼女は心から感心して言った。

⑧校門を入るとすぐ西校舎へ走ってしまいう次郎を三人はぼかんと眺め、そのあと南校舎のほうへぶらぶら歩いていく。守一が洗をからかうのはたいいこのときだ。

「ヘエー、おまえ、女みたいに長い靴下はいて、恥かしいのんか」

紺のセルの半ズボンから突き出た洗の脚は、腿の途中まである黒い木綿の靴下におおわれている。ずり落ちないよう靴下留で固定されているが、歩いているうちに膝の下が弛み、左右の靴下留の位置がずれてくる。蒲柳の質の息子を慮ってのことであつたろうが、それなら長ズボンのほうが良かったような気が、鶴子にもするのだった。

洗は俯いたまま校庭の真ん中で動かなくなる。

「守のアホ。守一のモリはイモリのモリ、ヤモリのモリ、コウモリのモリ」

と鶴子が腹の立つまま大声で言う、と、守一も負けていない。

「なんや鶴。ツールツルツル、ツールツルツル……これ素麺する音」

「アホくさ。鶴の一声で知らんの？ まあ、あんたにはわからんやろけど」

くるりと守一に背を向け、彼女は洗の腕を引張る。ぎくしゃくと彼が歩きだす。なんとか玄関の靴脱ぎ場までやってくる。あとは上履にはき替えそれぞれの教室へ散っていくだけだ。

自分のクラスへ入ってしまえば、鶴子はもう洗のことは忘れてしまふ。廊下や校庭などで、あそこにいるな、と眺めたりするが、彼女にしても学校にいるあいだはしぶん緊張を強いられるから自分のことで精一杯になる。半日の学校生活で疲れ、帰り道には物も言いたくないときがある。校門を出て右へ曲る級友がバイバイと甲高い声で手を振るのにさえ、彼女はむすっと口を閉じ、ただ右手を胸の前で小さく振るだけであつたりする。

⑨道筋にある、精米、と看板のあがつた店の前を、うなだれて力なく歩く姿がある。洗だ。駆けて行けば追いつける距離にあつたが、鶴子は歩調を変えない。

黒い靴下がどちらも足首までずり落ち、細い両脚が剥き出しになっている。頭だけはほかの生徒より大きいので、やはり大きな

制帽が載っている、下半身がよい頼りなさそうにみえる。途中の駄菓子屋に目もくれず歩いていくのを、洗は学校が面白いのかな、と鶴子はふと気になり、彼女だってそれほど面白いわけではないのだからまして彼なら、と思う。天理教支部の建物がある背の高い黒板塀の角を折れ、細い道を本通りへ出、また南へと道をとる。守一の牛乳屋がある手前あたりから、洗は駆け出す。背中のランドセルが賑やかな音をたて上下に揺れている。

(岩阪恵子「子供の死」による)

問1

A	く	C
---	---	---

 に当てはまる言葉として、最も適当なものをそれぞれ次の中から選びなさい。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| A | ア | お里 | イ | 目 | ウ | 手 | エ | 呆気 | オ | 逆手 |
| B | ア | 温和な | イ | 横柄な | ウ | 面倒な | エ | 俊敏な | オ | 放漫な |
| C | ア | 遣う | イ | 揉む | ウ | 引く | エ | 抜く | オ | 張る |

問2 ——— ①「けれどもそうしない」とありますが、その理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 二人とも四人兄弟の末子であるが、年の離れた姉妹しかいない洗はいつも特別扱いされているので、親が怒るまで甘えることが常であるから。

イ 鶴子と同じように洗も四人兄弟の末子なので、鶴子に対抗してもっと母親に甘えようとする洗の負けず嫌いな性格をよく分かっているから。

ウ よその家で遊びたがらない洗のことなので、洗の真似をして甘えた態度を取っていると、鶴子と遊ぶのを一層嫌がって母親を困らせると思ったから。

エ 同じ末子同士よく似た境遇で育ってきているので、お互い考えや行動も似てしまうが、今甘えると洗の真似をしているように思われるから。

オ 末子として甘やかされてきた洗のことなので、鶴子が母親に甘えている姿を見せると、よりいっそう母親に甘えることが容易に想像できるから。

問3 ——— ②「鶴子はいそいで座り直し、読みさしのまま放ってあった絵本を行儀よく膝のうえに拡げた」とありますが、その理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 母親は自分と洗とを仲良く遊ばせようとしているが、人見知りする洗が自分と遊ばないと思ったから。

イ 好きでもない洗と遊ぶのが嫌なので、絵本を読んでいるふりをして母の言いつけを断ろうと思ったから。

ウ べたべたと母に甘える洗に対して、落ち着いた振る舞いをして洗に大人びた姿を見せようと思ったから。

問4 ——— ③「やっぱり、と鶴子は思う」とありますが、「鶴子」がこのように考えた理由を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 洗はわがままに育っている、母親のいうことを聞かないのは仕方がないことだと思ったから。

イ 洗はいつも母親から離れたがらないので、鶴子の家であっても上がらないことは予想できたから。

ウ 洗は普段から警戒心が強く、知らない大人に近づくことを極端に恐れていると分かっていたから。

エ 洗は自分一人では何もできないので、代わりに母親の珠江が謝るだろうと安易に想像できたから。

オ 洗は自分の家でないと思えば勝手が分からないため、自由に振る舞うことができないだろうと考えたから。

問5 —— ④「恍は急におとなしくなった」とありますが、その理由を説明したものととして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 家からしめ出されたことに癪癪を起こして大好きな母親を打ってしまったが、眼鏡が割れたことで、行き過ぎた振る舞いだと我に返ったから。

イ 家に入れてもらえなかったことで母親の裏切りを悟り、思いのままに打ってしまったが、眼鏡が割れたことで我が儘な自分の態度を反省したから。

ウ なぜ鍵をかけたままにしたのか母親の事情を考えることもなく、激情にかられて眼鏡を壊してしまい、怒られるかもしれないと身構えたから。

エ 忘れ去られた怒りから思い切り母親を打っていたが、大事な眼鏡を壊してうつぶんを晴らし、母への怒りを解消できたことに気づいたから。

オ 歪んだ愛情から母親を打ってしまったが、母親が大切にしている眼鏡を割ってしまったために、嫌われるかもしれないと焦ったから。

問6 —— ⑤「うまい具合に話題をすり替えようとした」とありますが、母親はどのように話題をすり替えようとしたのですか。(a)すり替える前の話題と、(b)すり替えようとした話題をそれぞれ次の中から選びなさい。

ア よく叱る鶴子の母親の話題

イ よく叱られる鶴子の話題

ウ 全然叱られない洸の話題

エ 全然叱らない洸の母親の話題

オ 上下に動くミシンの話題

カ 閉じ込められる押入れの話題

問7 —— ⑥「淡い紫の闇を音もたてずに齧っている」とありますが、その様子を説明したものととして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 母親に対して意地を張りながら、自分から反省している態度を示して、母が許してくれるのを待っている様子。

イ 母親への甘えから素直に謝ることはできないので、押入れに隠れることで孤独な愛情を求めようとする様子。

ウ 母親に閉じ込められた押入れに自分から入って、懐かしい幼い頃の夢を見るために眠りにつこうとしている様子。

エ 母親からよく叱られるので、母の蒲団の匂いに沈み込んで、自分をとがめる母の気持ちを推しはかるうとする様子。

オ 母親には申し訳ないと思いながら、蒲団を母の代わりにして、甘美な寂しさをひっそりと味わっている様子。

問8 —— ⑦「彼女は心から感心して言った」とありますが、その理由を説明したものととして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 母親以外との接触を嫌がる人見知りの洸が、次郎や鶴子と一緒に嫌がらずに登校することが意外だったから。

イ 極度に甘えん坊だった洸でも、母親の体調を気遣って嫌いだったはずの学校を好きになったことに驚いたから。

ウ 自分の家でしか過ごせない洸が、母親のために医者の脅しに屈して学校に通い出したことに哀れみを覚えたから。

エ 幼稚園にほとんど登園しなかった洸なのに、母親のために嫌なことも我慢して登校することを立派だと思ったから。

オ 洸が母親の病気を治すために、学校に行きたくないというわがままな感情を克服したことを偉いと思ったから。

問9 —— ⑧「校門を入るとすぐ西校舎へ走って行ってしまふ」とありますが、その理由を説明したものととして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 母親との約束は学校に着くまでの間だけなので、着いたらすぐに妹たちから解放されたかったから。

イ 本当は妹の鶴子の面倒だけを見たかったのに、守一が自分に近づいてくることが迷惑だったから。

ウ 母の言いつけで妹の面倒を押しつけられているところを、級友に見られて馬鹿にされなくなかったから。

エ 鶴子が洸に意地の悪い気持ちを抱くように、自分も洸を見ているといういらいらして嫌になってきたから。

オ 洸や守一とはともかく、異性である妹の鶴子と毎日一緒に登校するのは男として我慢できなかったから。

問10 — ⑨「鶴子は歩調を変えない」のはなぜですか。五十字以内で説明しなさい。

問11 本文の特徴を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア ミシンやランドセルの発する音を詳細に描くことで、文章をリズムミカルにして読みやすいものにしてしている。
イ 「レンズが割れた」や「目が潰れる」等の残酷な表現を用い、物語が悲劇的な結末に向かうことを暗示している。
ウ 周囲の人々に子供らしい興味を示す鶴子に対し、母親以外に関心を示さない洸の異様な執着が際立つよう描かれている。
エ 親子間や友人間での会話に方言を多く用いることで、それぞれの登場人物の関係性を繊細に描き分けている。
オ 眼鏡や靴下といった日用品の描写をすることで、何事にも興味を向けて分析する鶴子の人物像が印象づけられている。

三 次の問いに答えなさい。

問1 次の各例文の [] に入る最も適当な言葉を、() 内の意味を参考にして選びなさい。

① 僕のやっていることは [] かもしれない。
(自分だけがよいと思って、他人の言うことを聞かないこと。)

ア ひとり相撲 イ ひとり歩き ウ ひとり合点 エ ひとり芝居 オ ひとりよがり

② あちこちの病院を [] にされる。
(責任を持って処理されずに次々と送り回すこと。)

ア とり回し イ 後回し ウ 狂言回し エ たらい回し オ 根回し

③ 事件と聞いて [] のごとくかけだした。
(動作の迅速なことのたとえ。)

ア 忠犬 イ 脱兎 ウ 猛虎 エ 名馬 オ 窮鼠

④ 僕が恋する人はいつも [] の花だ。
(容易に手に入らないものや人のたとえ。)

ア 高貴 イ 高地 ウ 高嶺 エ 高木 オ 高瀬

⑤ 彼が幹事だと [] 勘定になって困る。
(予算を立てたり決算したりせず、手元にある金に任せて支払いをすること。)

ア げた イ きんちゃく ウ ちようちん エ とっくり オ どんぶり

問2 次の①～⑤の文の に入る言葉を選びなさい。

- ① その論争に自分が一石を 。
- ② たいしたことはないとかを 。
- ③ 争いに乗じて漁夫の利を 。
- ④ 委員長の自尊心を 。
- ⑤ いいわけにもならない屁理屈を 。
- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|-----|---|-----|---|------|
| ア | くすぐる | イ | わる | ウ | くくる | エ | のぞむ | オ | いれる |
| カ | こねる | キ | たたく | ク | ふるう | ケ | しめる | コ | とうずる |

四

次の のカタカナを漢字で書きなさい。(必要なものには、送りかなをつけること。)

- ① 日本で作られたセイヒン。
- ② テレビでセンデンする。
- ③ リョカンに泊まる。
- ④ 風邪のチヨウコウ。
- ⑤ 釣り糸をタラス。
- ⑥ 明日はドヨウ日だ。
- ⑦ ケットウ値が高い。
- ⑧ 古いインシュウにとらわれる。
- ⑨ 後方にシリゾク。
- ⑩ 途方にクレル。

国語

名前

総 得 点

小計	一
----	---

小計	☐
----	--------------------------

小計

小計	四
----	---